里見八犬傳

巻之三

南總里見八犬傳巻之三

東都　曲亭主人編次

第五回　良將策を退て衆兵仁を知る
靈鴿書を傳て逆賊頭を贈る

山下柵左衛門尉定包は麻呂安西へ遣しゝ。その使者瀧田へ立皈りて彼輩は怱卒に帰降のよしをいはざれども。いたく怕害てはべり。遠からずしておのれみづから詣來て罪を勸解麾下に属せんと疑ひなし。その為体は箇様々々如此々々にいひな。とるのなきことゞもある如く。辞を飾り。首尾精細に飽まで媚て告しかば定包いよ〳〵こゝろ傲り。夜をもて日に続ぎ奥に士卒の怨をかへりみず或は玉梓と輦を共にして後園の花に戯れ或は縣の美女を聚へ。高樓に月を翫びき。又は酒池に牛飲しけり。肉林に

饕餮は一人の如くなれば老党も又淫酒に耽りて貪れども飽ことなく。費せども盡ることをしらず。王莽が宇内を制する日。禄山が唐祚を傾る比。天日私に照すに似たれど。逆臣はながく命をうけず。定包が滅んこと必久しからじと。こゝろあるものは目を側。爪弾をするのみなりけり。浩処に城外城中怱劇く。敵軍あまた寄来りと。いたく罵る声大かたならず。定包は後堂に酒宴してをりしが。これを聞て些も騒がず。それは何ぞとのるある。愁に虎の髭鬚を引く。安西麻呂等にあらざりせば。民を劫して物を奪ふ山賊等にぞあらんずらん。その為体を見て来よとて。やがて斥候を遣しければ。且して立皈り。敵は安西麻呂等にあらざれど。又山賊にもあらず。雖といへども千騎あまり。整々として稲麻のごとく。陣列隊伍法に称ひたり。中軍には一ながれの白旗を推立させるが。寄手の敵にはあらねど。あつまるに二千餘町。霎時人馬の足を休く。推量んぞ光景は侮りがたく見ゆと吻ぬあへず報知くれバ。定包聴て眉を顰め。白旗は源家の服色なり。安房上総にしく白旗立用ゐるものあらじ。とはいへ是も又人数の就る敵の謀にぞあるらめ。とまれかくもあれ。敵はいかならば長途に疲労て。この暁に来つ入らんとこそ。以く労を待バ勝ことはあるべきぞとて。追て撃へと令を傳へて。岩熊鈍平。錆塚幾内といふ腹心の老党に五百の軍兵を授しかバ。両人彼此と命を受遽しく。衆兵を率て。前門より馬乗出し。勇にいさみて馳去けり。さても岩熊錆塚は力も無當の力士にて。武藝も衆にすぐれたれバ。あらうさる奸佞のものなれバ。毎に定包が意に称はずといふことなし。一二の老党に重用せられて。よろづ傍若無人なれども。人皆その気に屈服隠して下知に属ざるものなかりけり。されバ山下定包は日来より。彼両人を寵愛しつ。この

日由村けの大将ゟ撰出して遣しつれバ。今ハや寄手の奴原を蹴散さんと疑ひなし。さあ〳〵騒ぐことなかれとて。只兵士に四門を護らせつゝ。身ハ又奥に入りて。婢どもを召つどへ。歌舞艶曲に興を催し。酒宴酣なりし比。正廳のさう〳〵しく。ようちぞ〳〵。と叫びしかバ。定包ハ管絃の手をとゞめさせ。耳を側異なるかな云声ざゞめく。男童どもこんとく来よといふに。左右に侍る下個の小息後めろともに立あがらんとする程もあらせず。込入かけるゝの表門より。搦手に討手向らてる軍兵ホ五六十人。数ケ所の深溝を履こえけり。大将岩熊鈍平を槍の手人に指り乗せ。舁くながら孫廂の。ほとりまで推よせ。異口同音に注進〳〵と喚りつゝ。手員を撲地と扛おろし。二帯[illegible]門客てこと。えゝ蹲居ほか。伪武者なれども二ケ所三ケ所痍を[illegible]なかりしかバ。玉梓ハ劇惑ひて婢どもに扶られ。屏風の背に隠れ[illegible]の為体。敗軍となりてしかバ。定包ハ呆果て。これハ什麼何なるぞと。同じく先にまどろみたる。老軍ホ頭を擡えやし屋も面ぶせたる。大将の軍配に躬方の進退一致せざれバ。敵を攻めしに。いやまさる勇将あり猛卒あり。さるも大軍なりしかバ。撃ども射れども物ともせず。一陣に進む猛将。鑣の上に大荒目の鎧を重て。長一丈あまりなる鎗まうくしとうち揮りて。馬の平頸に引添へ。眼を瞋り。大音揚。群賊天罰詞脱まで白刃頭に臨むを暁らず。虎威を犯さバ愚なり。ゑらぎや里見義実朝臣。ホつゝに遊歴ましまし。州民推て主君と仰ぎ。逆賊を寇に報ふそが事のみならず。先に東條の城を降して。萎毛酷六を誅戮し。更に瀧田の城を抜て賊主定包を誅せんとて。孝吉先陣をうけあん。御導すつかまつり来ることの隊の賊将を。清塚岩熊とかへるを僻目[illegible]きのへまぐへ古もに仕へし。共に神餘の禄を給し。金碗八郎を忘れハせじこれ

彼古主のために漢を佐て秦楚を討る。張子房が孤忠に倣ひて。里見の君に扈従し。義兵を勧め奉り。敢刃に衅らずして一城を抜き二郡を畧し。既にその巣に近つきたり。非を悔て兜を脱き御方に参るものは生ん。憖防き戦ば天に向て唾き淵に臨て水を打如く。労して功なきのみならず。その咎その身に被りなん。いざ試よと喚りて馬に拍を鎗閃かして。縦横無礙に撃靡け。なかに一陣を突崩して。大将清塚と鎗を合し。人まぜもせず戦ひしが。孝吉大喝一声して。幾内が鎗巻おとし胸前ふかく丁と突衝て馬より撞と落せば。雑兵等走よりて。押て頸級取てけり。清塚竟に撃れしかば。則[illegible]岩熊鈍平大きに怒りて四尺六寸の大刀振翳し。金碗を撃んとて。真一文字に馳よするを。二陣に進む里見の老党堀内蔵人貞行と名告つて。紺糸の甲に鍬形打たる冑の緒を縮連銭芦毛の太く逞き馬にうち跨て。備前長刀の鋼さゞりに菖蒲形なる鋒挟て。渠奴なりしが五百倚に撃しめんと金碗に会釋もなく。馬と躍らせ衝と出て。鈍平を遮留め丁々と戦ける刀尖より火を散し。一上一下と煉の大刀閃かせど勝まけ見えざりしが何とかしけん岩熊は馬の平頭砍削れ土のみ共に轉輾ば。貞行長刀より延てつく。内兜を碾と突。あわや鈍平斬れぬべくみえたる処。某名肩に引被辛じて逃走ば。敵の大将里見義実三才駒に雲珠鞍置して甚やゝ小鐙つくる威風凛然。四下を拂て。馬上ゆたかに麾うち揮りつゝ。今に後に勢潮の涌ごとく。咄と喚て攻立ば。御方はやうやく砕れて兜を脱弓を伏大かたなりて降参して。却すゝみて残れる種ゞに従ひて六十餘騎。深痍浅痍と負ぬもなく。ゆるゝ必死と順きて逃ふかしければ死平面あげにめいくれとさつれども。小髪の外を脱ずて背を馬に働らしえ

防ぐも櫓ならぬ日数まろうの冬の蜂痛くハさゝずとかはり掠をひくやうハ蝿乃息だにある物の益にハ立ざりけり。定包ハ独あくまで眉うち顰め大息つき。里見ハ結城の方人ゆゑ。彼城没落ありしより繋ぎけり。と思ひたるに処々漂泊して。大軍を起せしなどいふものもあらねバ。實に東條落城して。酷六撃れたりといふ。城兵あまた集りて。告などのことあるべけれバ。又彼金碗孝吉ハ神餘譜代の近臣なれども遂電せし癖者ぞ。身の措ところなきまゝに潜びかへりて彼此なる愚民を惑し。野武士を集めさまざまなる流言して。英気を折く詭の計にぞあらんずらん。寄隊の惣大将ハ真の里見にもあらじといへども。予が為に腹心股肱の勇臣たる藤内ハ墓なく撃れ。鈍平深痍を負しも時運によるといひながら。侮りがたき敵にぞあるべし。とて四門を堅く守らせ東條へ人を走らし

あらせ。その消息を問せんにハ虚実ハ明かなるべきぞ。といふ言葉のいまだ訖らぬに。小竈後に走り来て。東條の落武者に逃入りたるよしを告るにぞ。定包ハいよいよ呆れ亦恐懼を貌にハあらはさゞりけれど。その猝の難をみづから慰めんど物ともせず庭門より気をもませよらくとのゝしり立れバ。すゞろなる果て走去けり。且して東條ゟ酷六が従者落て。辛く脱れてたる雑兵ハ三四人。十王頭の籠手臑當腹巻ぬらしけれど。餓鬼のごとく疲労果て。膝ま[illegible]掛け引く足の一歩高く。一歩ハ低く。庭門よりしろめかし入るを定包近く召よせて。あらまし問ふに。東條ハ攻られたへず。落城せざる先にして注進ハ為せずして。敵はやこゝのこ寄せたる後に阿容として来るハ六日の菖蒲十日の菊。その詮絶て何べきものかハ。かくまでも猶度なりと眦を竪て。おそろしく四人齊しく怒らせ。あの敵あらくふ理なしといひながら。縡ハ呼吸乃間に起やまじく。落城

志さくハバ。亡する件ハいかゞその故ハ如此ところあり。箇様〳〵にけふと小湊なる村長ら〻金碗八郎が縛めて深夜に城戸を開かする計策の為体。透間もあらせず敵の大軍どもへと迫入りて矢庭に城を落しけり。萎毛酷六ハ妻子を[illegible]の岡より落行く処を金碗八郎に追蒐られて妻子ハ谷へ滾落。皮骨砕けて死せしが。萎毛ハ金碗に捕れる縛の顛末委細に演説ア。某ホこのある然時も[illegible]せらんと思ひけれども城兵過半降参して敵へまゐらく。勢付ぬ街道を走りしと見え追撃れんと疑ひあるしとゆへ径に遠り。山越をして行へハ敵より後にまつとくくあん智を掌りと見兆に及ばずと。勸解ハ定包歯を切り。原来金碗八郎が結城の落人を引入まて縛み彼奴が計ありしいでやみづから馬乗出しく。まづ金碗奴を生拘らバ熱して腸を啖ふ〱あらんや。とて出陣の准備をせしと跳揚て敗囲バ老軍ホへよし

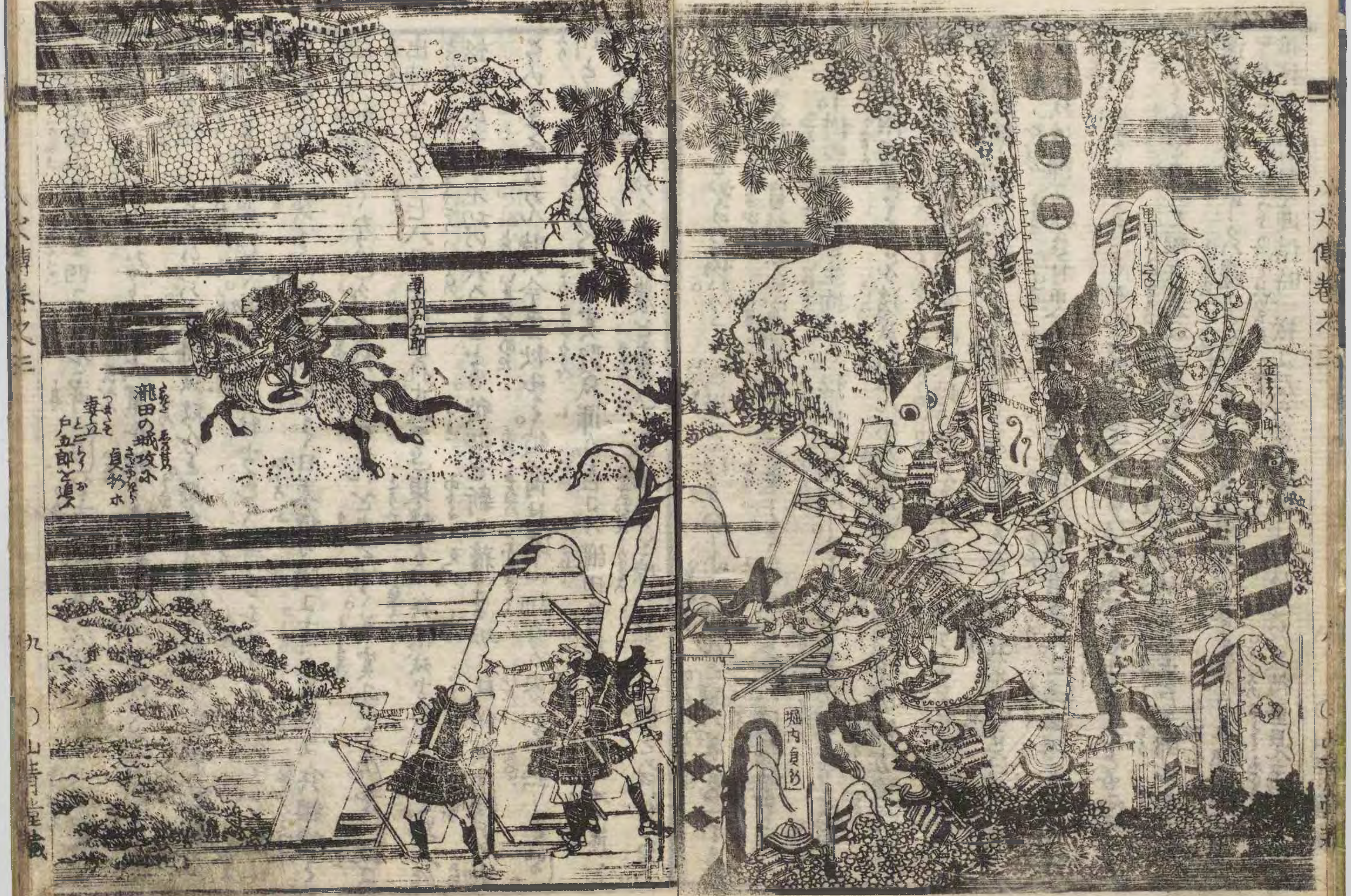
あるやと呟きあへず東條の落武者に目を注しく瘦肩岩熊鈍平を擡起し。皆の者共に退出しを定包ハ[illegible]して勢猛く罵りぬ。されバ四邊に人どもいかゞひそまれバ。つく〴〵ど思ひ久せバ熱に弱て出んハ究めて危し。要こそあれと訖より点頭老黨近習を召よせて籠城の准備是彼とおちもなく說示し。義實大軍なりといふとも原是烏合の集り勢けなり十日を俟ずして兵粮竭て退きなん。そのとき急に追撃バ金碗ホいのちをさゝるなり。大将義實を擒にせんハ袋の物を取るより易けん。志へあれど麻呂安西ホ義實に一致しくめろ共に寄せ来らバとてハ少し大事なり。頗ふに麻呂小五郎ハ匹夫の勇士探るに足らずといへども憎きハ安西の思慮あるよし我隊くゝりさうらハ今利我のく誘引箇様〳〵に[illegible]東條をとり復さバ義實一旦逃まするとも何処へか還るべき進退そこに究まて

雑人們が手にかゝりて死ぬ敵の処よせざる間に件の使者を出しきなん誰か今予が爲に館山平館へ使さすべしと召び入れまく同しけれバ妻立戸五郎と喚る。もの声に應じて進み出願くハ某うけたまハらんといへバ定包大に歓び汝ハ巖熊鈍平等に劣るまじ[illegible]予が[illegible]許さんや。館山平館へ走行て景連にいふべくハ定包古主の遺蹟を収て新に二郡を領せしに結城の落人里見義実當國へ漂泊して愚民を惑し。野武者を集め。不意に起りて東條の城を乗取り。勢ひに乗して既に滝田へ推寄せたり。兇徒[illegible]その禍遠からず等類に及べバなり。定包不肖にハ侍れども正しく神餘の遺領を受たれバ舊好ハその家にあり。両君いかで鄰郡の兵役を救ざらん。共に[illegible]受あらんや。速に出陣して東條を攻給ひ敵の後を襲ひなバ義実三面六臂ありとも[illegible]戦[illegible]

あくまで[illegible]にせられん。絶て疑ひあるべからず。義實輙く誅伏せバ是両君の賜なり。定包ハ平郡一郡。滝田一城にて事足らん。[illegible]東條を攻おとしたらん人に長狹郡を進らせんと叮嚀に演よかしといへバ戸五郎面を瞻げ。御諚でハ候へども。よしや里見ハ滅ぶとも。長狹郡を人に取せてみづから所領を削るゝハ。外の援を憑むもよろしからず。賢慮をめぐらしたまへ。以後悔めやけれんと老黨ども諫れバ定包聞てあざ[illegible]うち[illegible]汝等も知らずや。予が計略よるなん。鷸蚌持して漁者に獲らるゝ長狹一郡を餌にして。安西麻呂に東條をとり復させ又里見をうち滅さバ景連信時利に迷ふて確執に及ぶべし。件の両將彼地を争ひ合戦[illegible]なるときハ一方ハ傷れ一方ハ必疲れん。しかるときハ則その虚に乗[illegible]。安房朝夷の二郡を取らん。當國ハ平均し。居ながらにしく

四郡を掠ふべし。喩をとりなばやしと誇負る譏喩せば。戸五郎は管蔵佩して定包が書簡をとりより身軽く鎧て駿馬に鞭うち館山を投て馳去り。さる程に里見の大軍詰旦未明より。瀧田の城をとり巻て息も吻せず攻れども要害固より堅固なる神餘数代の名城なれば。一朝に落べうもあらず昼夜をわかず攻るを既に三日に及へども。城兵は弊て出ず寄手もさすがに疲労ければ只遠攻にぞしたりける。浩処に武者一騎暮かゝる日ともろともに西の城戸より入んとして。溝端さして馬をよせければ。堀内貞行と見て渠奴は必定城より出て。麻呂安西に援を乞ひ。今立かへるとおぼえたり。彼生拘れと喚りつ。早雄の若武者等うけ給はると意あへず引く追蒐まゝ。城中よりも之を見て妻立と諜しとて西城戸を推開ば。戸五郎は轡と馬を入まして。そが侭橋を引しかば寄手は狩場の倫立る追失ひしさつらしん。

逃入るをも見るものゝ孫は。いらちて焦燥て。ちからに攻破んと聞ば。義実これを呼さへて貞行に宣ふやう。怒に乗して事をなせば。後悔せずといふことなし。件の武者を生拘りて。縁由を鞫問して後そが首を刎とも安西麻呂に相謀まで。さぞ後を襲んには。城はいよ〳〵落べからず。緒方の攻口合期して後に備脚を整て。常山長蛇の勢を張るには惣てまとをとゝあらし。丁嚀に説諭し。麻呂安西が禦げしくて。鋭て五百の軍兵を引きけて。堀内貞行が後陣に備させ。更に東條へ人を遣して。杉倉氏元に云云のよし告。城由断まずからずとて。よくそのところを得させあひ。金碗孝吉なるとゝもに。みづから郷を遶りて。短兵急に攻かゝりし程に。定包は妻立戸五郎が恙なく還るよしを聞より。遽しく召入れて。その消息を尋るに。戸五郎流るゝ汗を推拭ひ。さつは景連信時一族に及ぶまで領賂しくひかれ又彼里見主従への


里見義実
金まり八郎
堀内貞行
妻立戸五郎
義実瀧田の城攻に
貞行亦
妻立戸五郎と追入

さしも館山なる。安西に身を寄たりしを。大かたならず威されて。逃吠ゑ白徒にいらかしく日ならずも。大軍を起しらんとするよしきこえとそ景連の信時も娟しと思ひいへバ。東條を攻んと疑ひたるくいと報知まへ定包がもとへ鋏び戸五郎を呉びて。物聚被させ。おまじく寄手を禦とて。さく館山平館より援来つる兵侯てとり。かくて日来経る随に寄手ハ既に兵粮竭て。三日の貯禄なくなりしかバ。貞行孝吉これを患ひて。義実にまうしけり。既に出陣ましくて七八日を経されたれバ。東條より兵粮をおくらせまいらせど。やうに杉倉氏元ハ老功の兵なれども。彼処と新に獲たる城ハ民催促に従ハで物とのへまさやりゑん。時ハ今麥秋なるに。彼齎せ遠山畑なる麥ぞや熟しぬらし。刈とらせいかやといへバ。義実頭揮り。否これ瀧田を攻るハ民の塗炭を救んためなり。今その農を奪ひ。その生麥を掠とりて兵粮とるべきかハ。人を食ふて身を肥す。虎狼に等しからずや。加以長挾の農民催促に従ハず。彼処に兵粮とのぼらざるハ。是こそ徳の至らぬところ。速に退陣して。徳を脩め民を撫。時を待て瀧田を攻んさへあらずや。と宣へバ貞行季時ら傾け。仁心ふかくましませバ。われん勢を責て。かくや。なぞ民を憐をかけてこのに有ゝるの谷にさされ。今とのおすくふか。士の兵退かなるんかれいかなる城より撃て出難義になりなバん。今宵篝火の数をおしくして。攻める如くに装せ。真夜中過て後陣より軍兵を退せ。村立際るを処とに伏兵を設置君中軍におりまし。某殿つかまつらバ。継城より追撃しくとも喉笛んとまれしバらく。るぞふの欲いへ死とらの孝吉がおへせど。杉倉生の計策司なのらさるおあらをしてちさでかい只身を衛り。敵が御ぐの外なれのとめし愚按さみるとれハ三四百の壮士等に計畧を授け。麻呂安西ホか頼をめくらし。

指物笠印なども。皆その摸様に打扮して。黄昏紛る比及に。我本陣の西北を過りて。城に入らんとするとみせなば。かねてこゝより犇々と遮留て追ひかへし。同士戦を見せたらんには。城中よりこれを見て。さハ館山平館より。援の兵来ぬるぞ。彼救へとて。城戸推開きて。かの援兵に力を戮し。城へ入れんとせざらんやハ止ん。そのとき件の軍兵を先に立して。我三軍その随につけ入らば。一挙して城を落さん事。妙ハいふべからず。と正首に謀りやうせバ。義実つく〲とうち聴て。貞行が策ハ危からざれども我に益なく。孝吉が策ハ巧なれども甚危し。およそいにしへの聖王賢将ハ仁義の軍を起すとあらバ。詭計のごときハ擯けたまへり。唐山晋の文公ハ詭計を用ひしかバ。五伯の一と稱せられしのみ。よく周室を佐けり。孫呉が兵法ハ詭道を旨とし。只戦國の習俗也。策よしといふとも。詭をもて敵を滅し。その土地をたもつとも。何をもて民を

教ん。汝達の策に従ひかぬるハこの故なり。定包富饒の地を有ち要害の城に籠り且三年の糧ありとも。防禦の術尋常なれバ。落しがたしといふにもあらねど。一時に城を乗取らバ。罪なき民を多く殺さん。[illegible]人つるとて。定包に従ふもの皆元悪の人のミならんや。一旦城に籠るとも。その楽を共にせバ。竟に憂を共にして命を其処に隕しつるハいと痛しからずや。秦の降卒八万人を坑にせし項羽ハいふもさらなり。秦の蒙恬漢の霍光がごとき智勇の将ハ竟に後なし。人を殺すことの多き故ならん。我所ハ定包のミ。只渠一人を誅せバ足りなん。その餘のものハ[illegible]口嚀に說諭しなバ。[illegible]孝吉[illegible]人をひたすら感伏して久しく[illegible]となりけるが。やゝありて件の両人ハ嘆息し。賢愚元智の外に出て。昔の聖王賢将もこの人やいふべき。

あれど時既に澆季に及びて利に聚ふもの甚多く。徳によるもの究て寡し。君が恩愛浅からで。敵城に籠れる民なれど。助まほしく思召ど。勢ひ両ながら全からず。兵粮既に竭なんず。詭の計のごとく城を乗取て戎要せまくと又詭計て退くを我止肯なりて後に日を送りなバ。仇躬方の千餘人饑渇に迫るといへど離き叛ん。さらバ又誰と共に大事を與しなんべし宋襄の仁。微生が信ハ日来笑せたまふならずや。粗且賢慮をめぐらしあそべ。さるべからんと申しゝぞ。義実莞爾とうち笑て兵粮乏しくなりぬるよしハ予も又已に憂ざらんや。仰ぎ見れバ空の気を彼此とよく瞻望れバ。東南のかたなる豆畑に鴿鵓求食あり。彼河辺より聚ふとすれバ瀧田の城より旦に来て。夕にねぐらへ還るらし。鴿ハ源家の氏の神八幡宮乃使者とぞいひつたへたる。よりて不意些の鴿を獲たりしかバ則神に祈りなん。

上役ども事にあたりて竊に羅して件の鴿五六十を捕へ。かくて数通の檄文を書写めし件の鴿の足に結びて放さバかならず城へ還らん。さるときハ人怪みて鴿をとらへてその書をよみんべし。かくや捕たる結目解て落るものあらん城中にあるとあるもの。その檄文を披閲て逆賊去順に帰も。あらん起らバ変を生じて城ハ攻ずも自然に破れん。縦ひ成らずも国の仇賊主定包とその三族を誅しく民の望を果さし。城兵豫て定包に従ひしもの。あるとも又帰順ならバ悉く不誅せじとまんと陥ふも仇の為に城を守る欲望を又不便なり。誠に小児の智に似たれども果敢なき謀に似ても是も異の此方へ寄せるとき待崎のほとりなる白旗の神に祈まバ山鴿の祥瑞のいまに今又まちに鴿の謀あらバと祈るのみ成るかぎりハ神にまかしく如此。らんよと仰まバ貞行孝吉まぞしく甘じて。微妙謀せあひにけれ。今定

包が罪状数へて。城中へ示さんためにハ。これにまさるべき術ハなし。軍民一トたびその書を閲せバ。憤發して乱を生じ。賊首の頭を献らん事ハ。速に行ひぬべし。と辭齊一應まうしつ。金碗孝吉奉りて。草案を綴る程に。たちまち書出さ[illegible]士卒を聚合て。数十通を写させけるに。立地に写し畢しかバ。その日ハまだ暮ざりけり。かくて義実主従ハ。香を焼神酒を灑ぎて。白旗乃祠を遥拝し。豫て捕おかせたりし。数十羽の鴿の足に。彼檄文を結著て。そがなかに放ちたれバ。巣に還ると翩々と飛揚つゝ。うちつれ立て。みな城中へかへりけり。堅くも結バぬ状なれバ。鴿ハ城中へ入ると共に。おのづから結目のとけざるハなかりしに。殊更不思議なりけるハ。此度軍役に驅入られし。平郡の莊客們が小屋のほとりへ。鴿も還へるを落せしが。そハ什麼何ぞと[illegible]衆皆に拾ひとりて。遽しく推開けれハ。

流水不附于高。良民不從爭逆。若夫佐桀討堯。猶水而附高也。謂之悖於天。雖欲久。勢不可得。抑賊主定包者。奸詐以作主。蠹毒以虐民。雖云王莽祿山。又何加焉。恭以吾主源朝臣南渡日。未幾。見推于衆。而討逆援民於塗炭中。德如成湯。澤似周武。於是乎。取東條。畧二郡。將破其巢也。可憐汝衆人隕命於賊巢。因以喩示于此。奚不速歸順。奚不功以償罪。區々取惑。雖悔曁焉哉。天鑒不悞。王事無盬。恭奉台命。以喩示。

嘉吉元年辛酉夏五月　金碗八郎孝吉等奉。

とぞ書たりける。軍民にこれを殘して。僉歎びていへりけるハ。彼御曹司を

仁君なり。曩日刃に衂らずして。東条の城を落し。今又こゝに吾們を憐ミ給ふをかくの如し。御名をきくだに慕しく。召にはせらざるにはあらねども。一てや城又斬入らまて。十重廿重に囲までハ落つべきよしもなし。塀を踰城溝を越彼処へ来まゐりしとも。今さら殺させなんどとおもひし故に黙止たり。所詮寄手に内応せんとて。隙を窺ひ日を過さバ畢竟に発覚て彼処へハ得参らで鏖にせられなん。速に思ひ起して。本城へ火を放烟を揚て寄手を誘引。縡の紛に乱れ入りて。人喰馬を撃殺して。そが素頸を見参の臺出物に進らせるべし。一ッにハ年来乃冤を其処に返すべく。二ッにハ里見の君の御感にあづからせ給ハんとて。密に聚合て。衆議すでに一决せる折から。或ハ又阽ミて。第一の出張人なる錆塚幾内を討果さるれど。彼岩熊鈍平ハ手痍大かた平愈して。二の城戸を護

なるが先君神余光弘を弑せさせし逆臣と。渠ハ馬奴なるものなれども。こゝろ捍く。膂力強り。定包二郡を押領せし後漸々に重用せられて。民の膏を絞とる。奸智ハ主に異ならざれども又彼妻立戸五郎ハ総角の比よりして。定包に使はれて随一の近習たり。武術才藝人に勝れたれバ。今ハ主のかたはらを去らず。かゝれバこの二人を撃たずんバ。本城に乱れ入るとも。彼等ハ固よりその黨与なり。忽地遮留られて。事遂ざることありなん。この儀ハいかにと密語バ。皆有理と思ひて。さらバ件の両人を撃とりて。その翼を除き去思ひの随なる働きせよとて。その部状ぞ定めてける。その次の日妻立戸五郎ハ投撒文を拾ひとりて。読も竟らざるうち。驚き慌忙て。二の城戸なる岩熊鈍平が本処へ赴き。箇様々々のよしを。いと速に告あげて。荘客們を搦捕その禍を未発に避ずハ。由しき大事に及ぶべし。といひつゝ懐より一

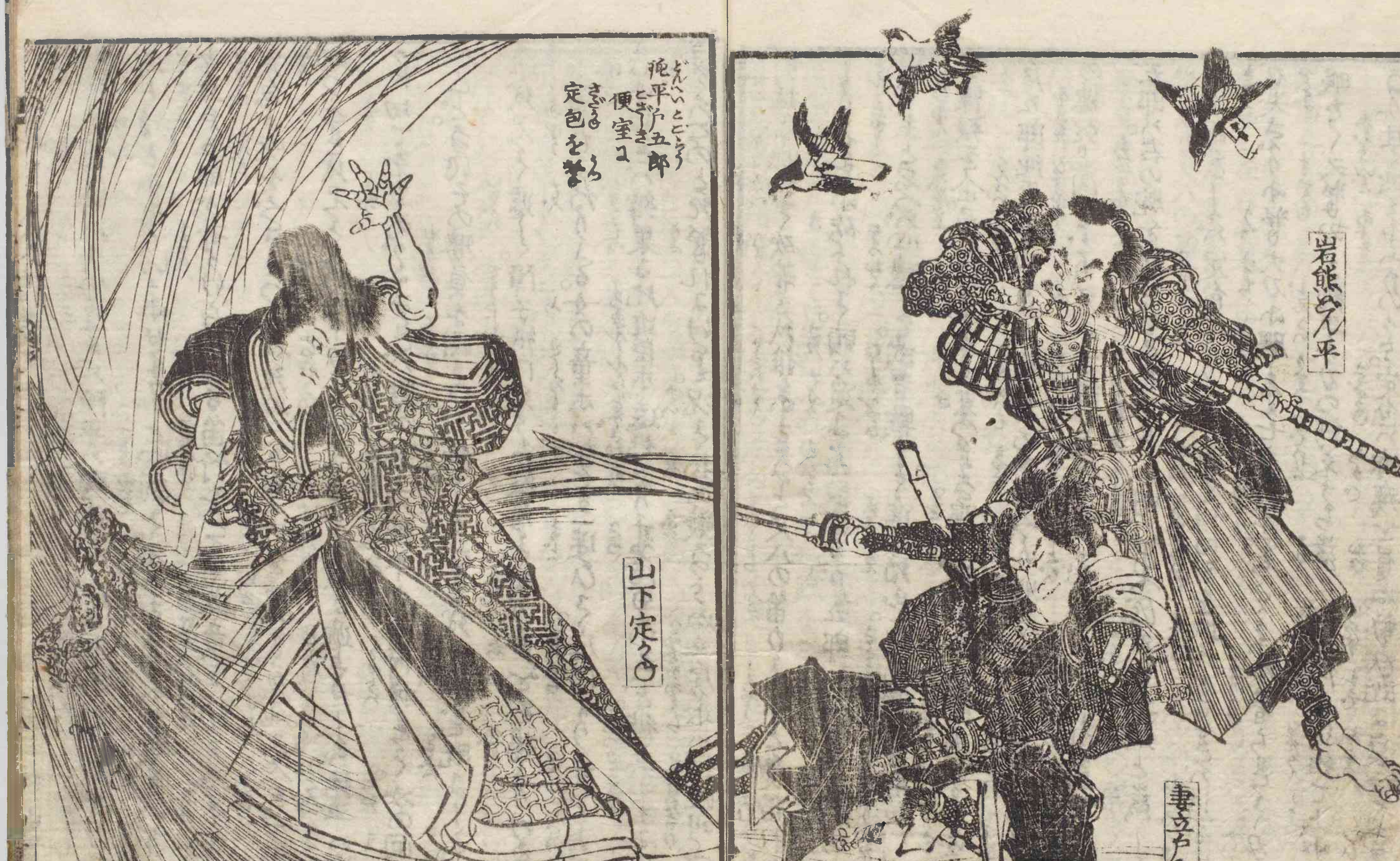
通路より出し。推量ふに死て閣ハ純平へよく申入ぬ。この事ハ赤とゝとおろかならぬ徴文を拾ひぬる驚たるに所見廻てありし。どう出んて合して見るふその文言一句も違ふとなかりしかバ戸五郎ならず上息つ死寄らの間諜事成て躬方に野心のあるにあらバこの城なが保がてしこの怨ままをべうもあらぬぞ膝へある共に告をらん。とひあへぞ。立んとまる袂を引と先妻立生且く俟ぢろぬさきとるすあり。と理かく禁て。備よ推居。四下をみるふ人ハわのにれど。喙む小るふ異ろうなぞ。えがく左右をとんえりて扇を口ふ推當て。耳邊よ顛さし著ことこの密書とぬくりしより。彼此よまつろを著るふ。只曾寄ら渇望し。ちの城を献らんとなへざるあのへ口いぶりふこれと和殿のきさ隣よより。これと和殿を撃よりて。衆人事を起さんとそ。衆議すや一决きてしと響よある人密語ぬ大廈の傾覆らんとまる

ときよ一木いかでか支へ得ん。汝狂ん懇に劍を立て。雜人ばらの手に死るべうと朽すしなるならずや。速よ思ひ決めて。定包を刺殺し城中の民ともろ共に里見ぬしに降參せバ。衆人の怨を釋て死を脱るのみならず勸賞を思ひのまゝあしく榮を子孫に傳かん。和殿の四月中いかにぞやと問まて戸五郎呆果て一ッ行のすぞ猶豫や狂ふ和殿が神餘に仕しとなれバ僕よ馬の口取なりししハ吾君なかく用ひ給ひく。光弘ぬしの老黨よりし猜塚萎毛あるたよ大事を任しなふたまらバや。吾儕ハ國主定包の私卒たらて神餘が老黨なれどどのせしと死より。不便のあのよせさぶあろひ死恩を擔て恩をおもはぬことを報ふに仇とのてせバ何によりて人といはれん命を惜むハ勇もなく。主に敵へバ大逆なり。今一言えくしてんよ。その席を去せじと數圍小膝突立刀の鞘に手をかくるハ些も騷ぎ冷笑ひ忠義を主と

ものぞ。嗚呼なるとはいふものかな。今定包を誅さるゝハ故主の仇を報ひん。そを賊逆といふべからず。しからバぞや定包ふかく謀て。豫て己を恨むといふ朴平。無垢三等が手を借て。主君を弑せし辮の類。口外するハ今[illegible]。しかも其日ハ朝曇り。夏なる風寒く。落羽が岡[illegible]光弘の乗あひし鷚毛の馬驚きしと。定包ハ己が白馬を聴て主君に献り。おん乗替を候んとて。その身ハ其処より引さがり[illegible]てぞ朴平無垢三ハ彼白馬を遥に視て。定包なりと思ひしかバ矢比近くなるをまつに。彈と發つ箭に光弘朝臣ハ胷を射されて。馬より撞と落給ふ。その前の日に定包ハ吾倚を竊に招きよせ。如此々々の密謀あり。汝ら主に荷擔して狩倉の朝立に國主の乗馬に毒を餌へ。事成るときハ重く用ひん。とこそハ當座の賞録とて。物數とらせけり。[illegible]と思へど。彼ハ老臣これハ奴隷。勢ひ敵すべくもあらず。否といはゞ殺されなん。命に換るものなし。一議に及ばず兼約して。その日馬をバ驚しけり。かくて二郡両城ハこれ定包にとらせし。この徳この誼に報んとて。今老党の後にたゝせしや。大事を任するとも。絶て恩といふべからず。これらの所為あるものハ萎毛錆塚両人。あるじ死で。渠等ハ泉下の人とぞなりぬ。今でハ和殿の主なれども。旃妻立生和殿ハ八月ごろ日来より。夫人に懸想しつゝ。暨ぬ恋に物をおもふとこれ豫て猜しけり。[illegible]人喚馬を撃とへハ賞にかえても捽を妻にせんを易かりなん。かくても吾倚に與せバや。と飽まで説きと。戸五郎ハ動く心とあるたに又[illegible]を釈て。忽地小膝を礚と鼓ゐる。所寔にあらで逆賊に従ひし。身の汚穢を洗んにハ。小理を捐て大義を伸る。和殿の議にこそ従ふべけれ。速にしたまへと大ぎさならバ諾ひしかバ鈍平

大刀に錆びたれバ。さらバとせん。引せんとて。迭に耳そばだてし。遽しげに相彈なり。こゝに山下定包ハ。宿酒いまだ醒ずとて。後堂を出きまた女の童のを左右に果らせ。翠簾を半捲揚させ。柱に身を倚て居たりし。徒然に尺八の笛吹すさみて。更に餘念なかりけるに。浩処に岩熊鈍平ハ。妻立戸五郎を先に立して。事あり〳〵と叫びつゝ。間毎の障子開放ち。主のほとりへ来る程に。ちら〳〵と見ゆる黝兵数十人。身軽く鎧ふて器械引提。後れて次の房なる。いろ〳〵の花鳥画たる腰障子の陰に躱まて。おの〳〵奥を闚窺をり。定包ハ鈍平等が忙しく来る気色みて。尺八の音をとゞめつゝ。何するぞと問せもあへず。両人齊一声をふり立。積悪の家餘殃あり。城中の民みな叛きて。寄る敵引入れしかバ。落城踵を旋すべからず。おん腹をめされい。吾儕介錯仕らん。といひも終らず。先に進みし戸五郎ハ。刀を晃かしと

引抜て跳掛て砍著るを。推条まちゐと尺八の笛もて丁と受留れバ。笛ハ中よりて二つに砍られて。頭ハ遥に飛散けり。と戸五郎ハ名のまだ一の大刀を撃損じ。主とよべバ心臆して。武者戰しく進みえず。定包騒ぎる眼尻引立。原来汝等謀叛を企。予を撃んとて来るよな。嗚呼がましやと。敦圍く立んとすれバ。戸五郎鈍平。透間もなく薙ぐ刀の下をくゞり脱。受るのじ切口尖さる尺八をもて鎗の穂ひと閃せども。身に寸鉄を帯ざれバ。飛去さんで打笛竹の鋭覘に。戸五郎ハ右の腕をうち脱され。忽地苦と叫びあへず。刃を擲地と落しつゝ。尻居に撞と倒れしかバ。定包得たりと走掛て。件の刃を取んとせしが。後に閃く鈍平が刀尖さがりに撃大刀に。隅より七九命を去て。うなに砍著られて。刃を奪ハ暇なく。又撃かくる鈍平が刀の鍔元すちつ落し。そが侭に引組て上になり下になり。且く挑ミ争ふあひだ。定包ハ深痍を負ぬ。勢ひ既に衰へて。竟に膝下に


𪐷平戸五郎便室に定包を撃ろ
岩熊どん平
山下定包
妻立戸五郎

狙ふ已に斬りに人を呼立ば。鈍平は頸斫れんと腰を撚まく中刀さへ振落されて後方にあり。いかにせましと心劇て。右へ左へえくる雌手の方に倒さし妻立戸五郎が持うけたる笛竹を。これ究竟と抜とりつ反さんとするを。定包が吭をぐさとつらぬかれぬ。戸五郎は竹を抜れて。忽地に人気つきて岸破と起つ。これを見て落せし刀を拾とりて岩熊に遞与せしかば。鈍平は定包が頸をうち切てぞ立あがる。されば夥の兵士は。鈍平等に荷擔して。次の間まで来に屯しどもは。其勝負を測りかねて。徘しく。これを扶けず。既にして定包が殺るゝを見て遽しく。障子紙門をうち敲きて。閧の声をぞ揚たりける。さる程に主の左右に侍りける。女の童等は。おそれ迷ひて。庭門より走り去れども。彼告にければ。縡果る比。近臣等。遠侍より馳来れども。彼兵士等に抑留せられ。ヨみくへこのとき誓しにけり。況て抱の数ならぬ女房等は。口々に泣叫ぶを。鈍平令して玉梓もろ共一人も漏さず生拘らせ。おのく金銀財宝をうばひのまゝに掠奪て。正廳の方へ走去ぬ。現天の人を罰さる時ありて。軽重慎とせし。定包奸智を逞しく。主を傷賊ひ所領を奪集ひ。浮雲の富をなせしといへど。百日を出ずして。又その家臣に殺されたり。加以そが首を取るものは。件の岩熊鈍平等は。もとより刃を用せず。切口尖りし笛竹は。是竹槍の刑に擬て。又彼妻立戸五郎は。定包が恩顧のものなれ。其も笛竹の讖現に驗れて一旦息絶して。悪人なりとも主と称つ。冥罰うけん。おそるべし。就中鈍平はその罪比んものもあらず。神餘が馬奴たりしを。逆謀とありつゝも。定包が為に主の乗馬を毒殺し。又定包に仕へて。ふまもくその悪を佐て。剝剝をさく民を苦め。悪報その身に係るに及びて。脱まんとて又主を殺ふ。縦若人に與まといふとも。めくの如くならしそ後栄んや。むかし後漢の光武帝は

子密をもて不義侯と為り。夫不義にして。封爵を受んより。不義ならずして。匹夫に終るこそよけれ。拙者向常歴史軍紀を読む毎に。かゝる條に至てハ一大息せざるヿなし。よりて今亦自注を附して童蒙に示すのミ。山下定包がことハ軍書舊記に傳あり。詳ならずといへども。主の神餘を害ひし。癖者なるよしハ。たゞらバ今なほ彼処に古蹟ありなさくしけれバよくも記さバ又後々の巻にくはしくいへなん。

第六回

倉廩を開きて義実二郡を賑し
君命を奉じて孝吉三賊を誅す

却説滝田の軍民等ハ。かの鈍平等を撃んとて。二の城戸陝しと詰寄せて。鬨を咄と揚しかバ。思ひがけなく塀の内より。鎗の穂頭に串きたる生頭を高く揚。衆人これ見よ。何とかきこゆる。これ見たるや。非を悔。逆を去。志を寄せハなかるべし。逆賊定包を誅伐せり。誘れたる共に城を開きて。里見殿を迎入まゐらせよや。同士撃とるべしと呼らしく。城戸を颯と推開きつゝ。岩熊鈍平妻立戸五郎。鎧戦袍華やかに。軍兵騎前後に立して。両人床几に尻を掛。軍團把てさし招けバ。軍民等ハ呆れ惑ひつゝ。件の頸を向上るに。こハ疑ふべうもあらぬ定包が首級なり。原来鈍平戸五郎等が。賺るべき途なきを知りて。されバや定包を撃たるなるらん。憎しと思へど今更に。同士撃するによしなけれバ。已と我その令に従ひ。城樓に降參の幡を建て。正門を推開かせ。鈍平戸五郎等を先に立して。遽しく寄手を迎ふれバ。里見の先鋒金碗八郎。将の仔細をうち聞て。定包が首級を受とり。軍法なれバ。鈍平等が腰刀さへ取おさめつ。とく大将に報知をなせバ。義実ハ猶軍を進めて。その程へ近つきたまへバ。鈍平等ハ阿容ゝと。沙石に頭を掘埋めて。これを迎奉り。城平等より二行に

つれぬく。僉万歳と唱へまつる。且して後陣なる貞行も来にけれバ。前駈後従の隊伍を整へ。大将徐に城に入給ふ。隈なく巡歴し給へバ。神餘がゐまぞりし時より。只管驕奢に耽りしかバ。奇麗壮観玉を敷金を延べたといふべし。如以定包又民を絞て。飽まで貪り貯へ米穀財宝倉廩に充て。沛公が阿房に入りしとき。幕下が泰衡を討し日も。かくやとおもふばかりなり。さるまゝに義実ハ一毫も犯ところなく。倉廩ハ封させて両郡なる百姓等に頒与へバ。貞行等にいひつけて。定包誅伏せられしかども。尚平舘ゝ山にハ。麻呂安西の強敵あり。中にこの城を獲て。軍用乏しからバ。かのやし紙一毫も貯ざりし。百姓なんどに賜ふる。賢慮つやくところなし。と眉うち顰て。中々に喜ばず。うち点頭もせられずハ。眼前の理に似たれども。民ハこれ國の基なり。長狭平郡の百姓等。年来悪政に苦みて。今逆を去順に帰せしハ。飢寒を脱んとすればや。然るを又貪らバ。民を賑さずハ。それハ定包等に異ならず。倉廩に餘粟ありとも。民みな叛きなバ。孰とともに城を守ん。孰とともに敵を禦ん。民ハこれ國の基ぞ。民の富るハ己が富むなり。徳政空しからざりせバ。事あるときに軍用ハ求ずとも集ぬべし。惜むところにあらずと宣へバ。貞行等ハ更にもいはず感涙坐に禁かねて退出ぬ。却説次の日義実ハ正廳に出まして。首実検をとり。降人純平戸五郎等を召よせて。主を弑せしその趣を。金碗八郎して問しむるに。両人斉一やうにぞ申やう。定包ハ主を仆し。土地を奪ふ逆賊なれども。某等討とかゝるも。假にその身に屬しハ。竊に時運を待しのみ。これにより賢君の御教書をあつめて。桀を去湯に帰く。見参の牽出物ハ彼首級を齎しつ。とほこりかに陳まうせバ。金碗八郎冷笑ひ。辞巧にまうすとも。そハまふしき

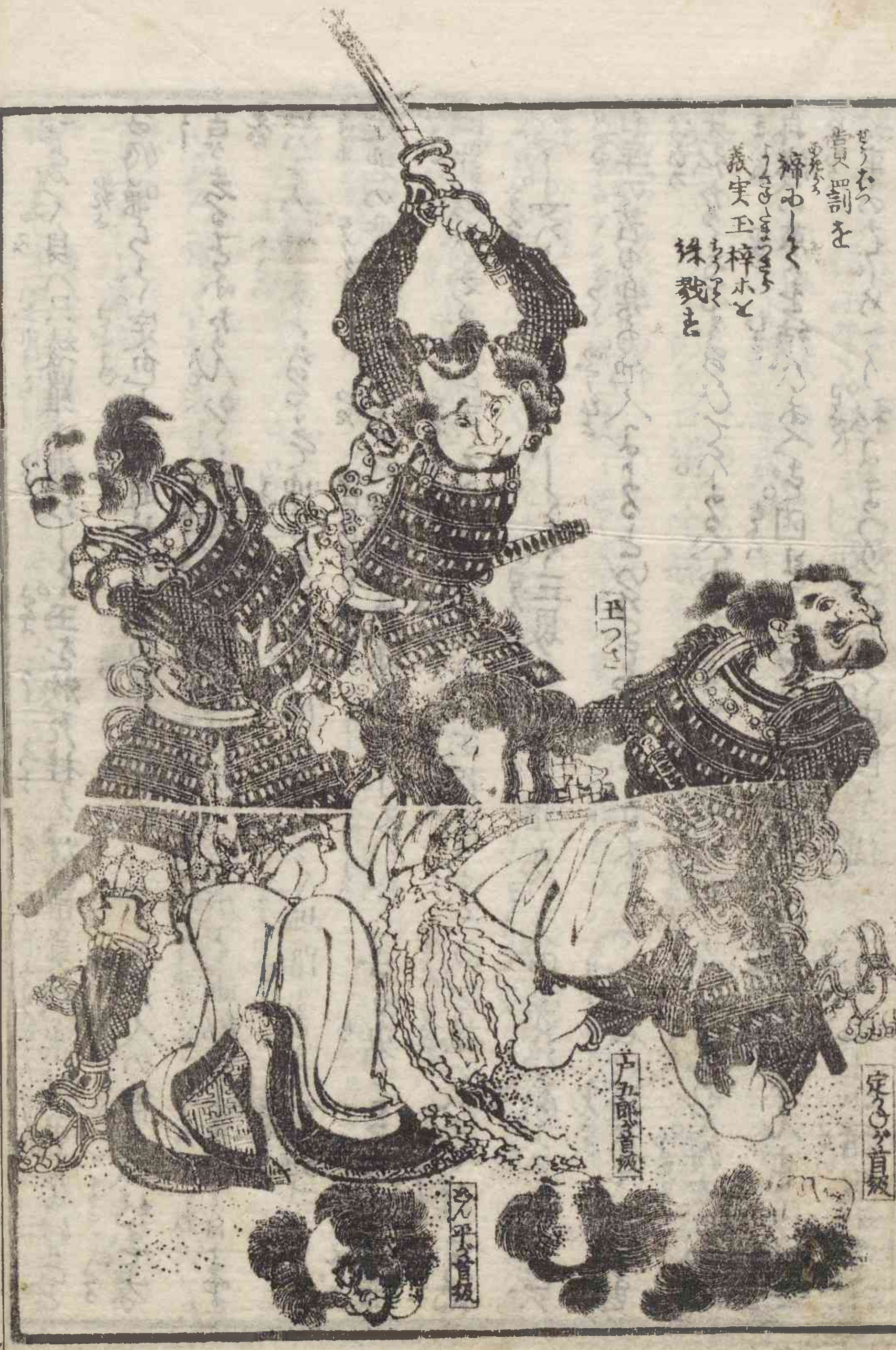
虚言なり。抑汝等両人ハ定包が悪を佐て州民を虐る縡既に隠なし。されバけふ軍民等。まづ汝等を撃なんとぞ。その後ハ聚る衆に汝等罪を恐れて。身の咎を脱ん為にとて定包を弑しなかりバや。孝吉御我業つまく城中の民に向その趣をすゝめしかまり。かくても陣まゐるやといふまゝて両人驚と倶に中に鈍平眼を静ていへ。その戸五郎がこゝにあるべし。渠ハ総角の比より定包に仕しかバ第一の出頭人なり。某ハ戸五郎なればいふべし美女玉梓に智恩ひを運し。密事を果んための某ハ称揚しく初大刀を帯ていひし。某底意を情しかバ身の潔白を明んとぞ彼玉梓と生拘らせ押籠置て候へバ召せなるで分明ならんと。まで申して此彼の清濁を察しなへといひもあへバ戸五郎ハ聘ふしく声を立て八郎ぬし此奴が辞を実なりとなし其いまゞ玉梓に謀ありて主を殺しも躬古

さるらん鈍平ハ當初神餘が馬の口附にて落羽が岡の狩倉に定包に相謀して主の乗馬に毒を飼ひ光弘ぬしを亡ひし。定包二郡を奪ふに及びて第一の出頭となりたれバ民の怨も大かたならず。その咎を脱んために二代の主を弑せるなり。欺きあらんと苦に随に非をおひげく人を陥ん。罪をまぬかれんと争ひ果しさりしかバ八郎呵々とうち笑ひ。同ゆへおちて語るに汝等が奸悪ハ生をかへ世をかゆるとも。頭を続べき死よしもなきものを。定包が逆賊たるにまかせ。戸五郎ハその家臣として。脱るゝ途のあきよしなし。とぞ平ハ又當初定包が為に主を傷ひ。その蔭に立ぬなか。縡逼て亦これを弑す悪逆こゝに極れり。吾君民の父母として。仁義を上目としたまふのめし。汝等を赦しなバ賞罰遂に行ひれじ。忠孝なかぐ廃れなん。今汝等がまづ隠悪路頭にさらされども。その口つらにありせんとて法場に牽出せり。罪

定つまぬ律ホ干く赦しがたし。彼縛めよと喚きれバ。雑兵ホ走りかゝりて。鈍平戸五郎を撲地と蹴倒し。押て索を懸しかバ件の二人ハ劇騒ぎて。屠処の羊と恨ある賂結つ。只諄て己が死口説バ金碗怒れる声を激しく。汝ホ出て汝ホ返る悪逆の天罰ハ。八剣の刑さるべしとて。いそがせバ雑兵等ハうけあり。立どころに両極罪人が外面へ牽のくして時を移さず。その頸ぬうんバ緑竹の竿ホ貫て晒え検ホ倚る頃よ。金碗ぬうんび合を待く。彼玉梓を牽けとのよ。無残ある哉玉梓ハ姿の花もひらぐ夜半の嵐ホ吹萎れ。天羅網脱れぬ縛の索よ牽ゝ姫凡や何とかる子の立小騒ぐ。雇え時ろく絃ども。アるるめハ暗兒孫庵推さえらまろ。豫て知る孝吉よ愧ひし。要時も汲ぶ擡るバ。金碗ハ面をあげぬと呼びけく小膝ぶすゝめ。玉梓汝ハ前国主の側室えとありながら。ならび寵よ誇まで主君を蕩し政道ホさハらうけく。忠臣を傷賊さる。その罪ハ

汝とるえ身ハ只綾羅ホ纏ひて。玉を炊ぎ桂を焼。富貴歓楽極まなけれど。猶嗛らず。定包と密通せり。その罪ハ二ツあり。又ひとつハ人の告る所ぞ。稍ぎ孝吉が走るを予ふなん。かくて山下定包が逆謀ハ皆よ萃成し両郡を奪ひし日よりぞ。汝ハその婦妻となりて愧るをなく。憚る事なく城陥るまでぞ死ずありしハ。造悪の業報なり。生てハ縲絏よ繋れ死してハ祀らざる鬼となりぬる。天罰国罰の至るやと声高ホ叱されバ玉梓ハやうやく頭を擡て所とあるかくし。女ハよろづあるくして三界よ家なき身の夫の家ぞ家とはすなれバ。百年の苦も楽も他人よよるといふぞや。況てこれハ先君の正室ならねど。光弘なくなりてハよるべなき身を生憎ホ山下ぬしに思れて深窓ホ冊れ。再寝の夢を結びあへど。因果とろのしる過世の因果よあらんかし。又給事のならぬ一り。私よまつりごちて忠臣を傷る。山下ぬしホ惜由あらまし。

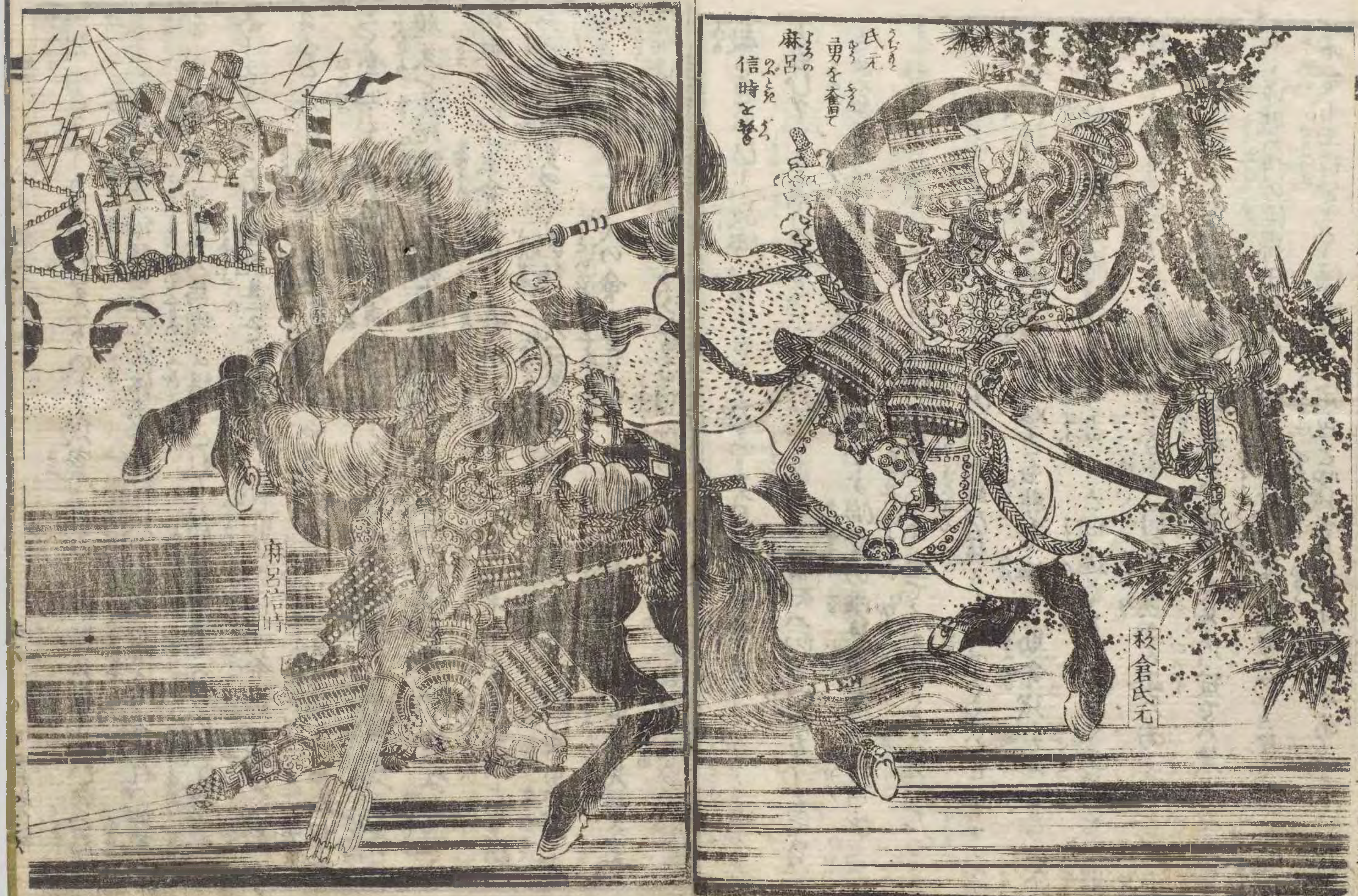
とかく汝ハ侫の姑媚ゆゑに。実あるべき者ハ侍らざるを。譬バ神餘の老党若党恩禄高く職重かりも大かたならで二君に仕て。義をわするゝも。恥と甘んずるが如ど。きハ黙止。主君を凌ぎ逐電し。更に里見に随ひて。瀧田の城を落しめんど。鬼の毛だろずも先君のおん為ゆゑなるよし乎。されバ各栄利の為に彼に仕。さに後の男子をもてめくの如し。女子のうへにハ流磨の網をゆるさるゝ世にお肩ろり然るを何ぞや玉梓ひとり。その死のきはへ罪なかしく。飽まで憎まさあのきる。いと兼ぐる死証言やと眼尻ゆへして怨ぎ五穴八郎帯我撲地に哉。そハ過言なり舌長し。既に汝が奸曲ハ推量の頭ろかなれ十目乃視る所十指の指も所なる所を懾伏せざるみづから辞しく喩を引外面如菩薩内心夜叉顔し心ハうらうへなる。汝ハ綿の嚢に包る毒石に異なるを而遂し死女子なるらバいのるゞ城を傾くべし。さらバ酷く鄭平かなるハ神



賞ハ罰を締ゆしく義実玉梓ふを誅戮き

玉つさ
定包が首級
戸五郎が首級
どん平が首級

餘譜代の老黨なれども。利の爲に義を忘れ。逆に隨ひ惡に荷擔し。冥罰遂に脱れず皆八劔に誅せられたり。又孝吉ハ之と異なる。灰を呑漆し。恣を變て故君の仇を狙撃んとせしかど。單身にしてその事遂ず。五猜のあるくよ彈んとせり。一旦は又よ尽をたのみしかど。里見の君に随從して。祖先の躬方を集め。今定包を族滅して。志義致したり。かくても亡ぶるの事實の名なるまも先君に益あることなしといふや。豚を抱死て臭死を忘る。婦女子の愚癡といふべき也。みづから許しくなかくに人我外死るハいかにぞや。覺期せよと。敵國だに玉梓道理に責られて。さりとも嘆息し。寔に姿罪ありなれ。志ろ里とも。里見殿ハ仁君之東條にても。ミづからも賞を重くし罰を軽くし。敵城の士卒といふとも。來るものは殺しなりし。用ひ給ふと聞たり。ものやその罪あるが身に。婦女子ぬ物の數にも得らじ。給ふなくと赦させ給ひね。故郷へ還し給はらば。さてのみはめでたく幸あるならん。男女と差あれども。むかしは共に神餘の家に仕給ひし八郎ぬし。舊好はかゝる時執なして給ひね。と莞然と咲て向上る顔ハ。さながら海棠の雨を帯たる風情にて。白ひまかげる黒髪は肩に掛るも妖嬌て。春柳の糸垂て人を招くに彷彿たる容義。君ハ上坐に近臣數侍らして。この件の截判うちしめて。その身しか玉るに。およそ玉梓がさかしげなるその癡ありぬるとも。非を悔て助命をこふと思ふも亦不便ハ赦さなやと。おぼせしかば。孝吉にこと問近く召させて。玉梓その罪輕にあるは緣と女子なるをば助るとも。賞罰の方立ざるにハあらじかし旨よろしく計へかしと。叮嚀に仰ければ。金碗八郎親を更め。御綻ではあれども定包に亞ぐ逆賊八件の淫婦玉梓は。渠は戰の忠臣を追失ひしるのもなれば。光弘の落命も玉梓ゆゑなく傍に在て。定包と心を合せ。竊に計るにあらざれば。



氏元勇を奮て麻呂信時を撃

一朝にあるべくもあらず。とまうすのよしを察しあらで。賊婦が赦しをこひたまふ君も又その色に愛まして。依估のおん沙汰ありけれど。人の批評は味からん。されば妲妃を朝歌に殺され。太真は馬嵬に縊る。これらは傾国の美女なれども。玉梓が類にあらざりしとても國乱れ。その城敗れ。日に至りて遂に斧鉞を脱れし赦しあるべからずと辞儀しく諫まゐらせ。実もかくとうち点頭きて。過ちぬ誤ぬ。とく牽出して首を刎よと声高やかに立ちて仰せければ。玉梓これを聞あへず花の顔朱を濺ぎ。瓠核の歯を切て。主從を信とのみおもへと怨しき金碗八郎。赦んといふ主命を拒く吾儕を斬るならば汝も又遠からず刃の錆となるのを見よや。そのおもふ断絶せん。又義実もいふがひなし。赦せといひし舌も反引ぞ。孝吉に説破されて人の命を弄ぶ。汝は似ず愚将なり。殺さば殺せ児孫まで。畜生道に導れて。この世からなる煩悩の犬となさんと罵れば。物をいはせそ。牽立よりて。金碗が人々を率し。雑兵四五人立かゝりて罵り狂ふ玉梓を外面へ牽出し。軈て首を刎させける時に。程なく八郎は又仰を承りて。賊主定包玉梓に純平戸五郎が頭もろ共に滝田の城下に梟させ。現積悪の報ふ所斯あるべし見よと。あるが今更にめをさましてぞ観るもの日毎に堵の如し。さはれ程なくその暁に鎌倉来せ。曽我氏元が使者として。蟹崎十郎輝武といふもの汗馬に鞭を鳴らして東條より来せ参りて。氏元が報を取る。麻呂小五郎信時が首級を献り。合戦の為体を巨細にきこえあげゝりける。その圖は又さらに載るといへども。事多かれば巻をかへて。第七條のはじめにとくべし。又玉梓が悪念は良将義士に憑といへども。その子その子に貫録て。一旦不思議のいでて来るぞ。その禍は後竟に福の端となる。これ仮まで八回なり。閲者彼賊婦が悪言に。とらわれてきることなかれと思ふ総。

南總里見八犬傳巻之三終

冬